

# 現代ウェールズ語の自他交替

浅野千咲

chisakiasano@gmail.com

キーワード：現代ウェールズ語 自他交替 類型論

## 要旨

本稿は Haspelmath (1993) の 31 個の動詞リストを用いた調査の結果をもとに、現代ウェールズ語の動詞の自他交替にどのような形式的特徴があるかを提示することをねらいとする。現代ウェールズ語には *bod* ‘be’ を屈折させ、動名詞と組み合わせてつくる迂言文と、*bod* 以外の定動詞の屈折形を用いる文が存在する。本稿では後者を屈折文と呼ぶ。調査では迂言文と屈折文の両方を対象とし、それぞれの場合で直接目的語をもっていれば他動詞文、そうでなければ自動詞文と判定した。類型的に自他交替の型は使役型、逆使役型、両極派生型、補充型、自他両用型の 5 つに分類される。調査の結果、現代ウェールズ語は自動詞と他動詞が同じ形で現れる、自他両用型の自他交替が圧倒的に優勢な言語であることが確かめられた。

## 1. はじめに

Haspelmath (1993) では自他交替調査の基礎となる、31 個の動詞対から構成されるリストが提示される。このリストは第 3 節で提示する現代ウェールズ語（以下、ウェールズ語）の自他交替リストに併記するが、リスト上の番号が若いものであるほど動詞が表す現象の自発性が高いと言われる。このリストをもとにした 21 言語、651 対の動詞を対象とした調査から、Haspelmath は以下のような 5 つの自他交替型を提示している。

### ① 使役型 (causative alternation)

モンゴル語 *xajl-ax* ‘melt (intr.)’ → *xail-uul-ax* ‘melt (tr.)’ のように、自動詞の形が基本となる (Haspelmath 1993: 89)。

### ② 逆使役型 (anti-causative alternation)

ロシア語 *rasplavit rasplavit* ‘melt (tr.)’ → *rasolavit* ‘-sja ‘melt (intr.)’ のように、他動詞の形が基本となる (ibid.: 89)。

### ③ 両極派生型 (equipollent alternation)

日本語 *atum-aru* ‘gather (intr.)’ ⇔ *atum-eru* ‘gather (tr.)’ のように、同じ語幹に異なる接辞や補助動詞を付加することによって自他を表す (ibid.: 91)。

### ④ 補充型 (suppletive alternation)

ロシア語 *goret* ‘burn (intr.)’ ⇔ *žeč* ‘burn (tr.)’ のように、異なる語幹をもつ動詞を自他のペアとして用いる (ibid.: 92)。

## ⑤ 自他両用型 (labile alternation)

現代ギリシア語 *svino* ‘go out (intr.)’/‘extinguish (tr.)’ のように、自他で同じ形が用いられる (ibid.:92)。

Haspelmath の動詞リストを用いる上での注意点は、どの動詞対を取り上げるかによって結果の数値が変わるということである。たとえばウェールズ語には、英語の他動詞 ‘stop’ に対応する動詞として、*stopio* と *gwneud sefyll/aros* (いずれも動名詞形) の2つが上げられる。*stopio* を選択した場合、これは自他同形の動詞であるため、‘stop’ は自他両用型の動詞として記述される。一方、*gwneud sefyll/aros* を選択した場合、これは自動詞 *sefyll/aros* ‘stop (intr.)’ から派生したと考えられるため、‘stop’ は自動詞形が基本となる使役型の自他交替を呈すると見なされる。この場合は使役型の自他交替の割合が増加する。このような結果に影響をおよぼす動詞選択の問題は本調査上でも複数回発生したが、本調査では実際の運用を重視し、こうした問題が発生した場合にはインフォーマントによってより好まれるもの、ならびにコーパス上の用例数がより多い動詞を採用した。

ここでウェールズ語の基本的なプロフィールと文型について言及する。ウェールズ語は印欧語族ケルト語派に属する言語であり、連合王国西部ウェールズ地方で話される。2011年の国勢調査によると、話者数は約56万2000人である。現代ウェールズ語の礎には古ウェールズ語および中期ウェールズ語があり、同じケルト語派Qケルト語のブルトン語やコーンウォール語は勿論のこと、ケルト語派Pケルト語に分類されるアイルランド語やゲール語との繋がりも深い。ウェールズ語内部では北部方言と南部方言の大別があり、一般的に認められた標準語はないが、ウェールズ語学習書では南部のウェールズ語に準拠した発音や語彙、文法が採用されることが多い (小池 2011)。

ウェールズ語の基本語順はVSOである。(1)のような迂言文では、文頭の *bod* ‘be’ によって人称・数・時制が示される。(2)のような動詞の屈折形を用いた文では、人称・数・時制を標示する定動詞が先頭に置かれる。

- (1) *Mae*                      *Yoshimi yn<sup>1</sup>*                      *siarad*                      *Cymraeg*.  
       bod-PRS.3SG            Y.                      PROG            speak-VN            Welsh  
       「ヨシミはウェールズ語を話す。」(小池 2011: 55)

- (2) *Gwelaisi*                      *i*                      *gi*                      *neithiwr*  
       see-PST.1SG            1SG                      MUT/dog            last night  
       「私は昨夜犬を見た。」(Arman 2016: 19)

本稿では (2) のように定動詞が屈折形である文を便宜的に屈折文と呼ぶ。

<sup>1</sup> 迂言文において、文頭の *bod* ‘be’ と動名詞のあいだに挿入される *yn* は元々 ‘in’ を意味する前置詞であるが、進行相のアスペクトマーカの機能も担う。

ウェールズ語の自他交替については、既に Poppe (2008) が Haspelmath の 31 の動詞リストに基づいた調査を行っており、表 1 に示すように、ウェールズ語では自他両用型の自他交替が非常に多いという結果を提示している。

表 1 Poppe (2008) によるウェールズ語の自他交替調査結果

	Anticausative alternation	Causative alternation	Equipollent alternation	Labile alternation	Suppletive alternation
Welsh	1.5	0.5	0	26.5	1.5

ただし Poppe (2008) の記述には、対象としたのが迂言文であるか屈折文であるかを明記した箇所が見当たらない。よって本調査では、Poppe の調査結果を補充する形で、迂言文と屈折文を分けて調べた際にも自他両用型の動詞が優勢であるか確かめることにした。

以上がウェールズ語の基本情報と先行研究の概観である。次節では本調査での調査方法、および自動詞と他動詞の判定方法を述べる。その後第 3 節にて、迂言文と屈折文それぞれを対象とした調査の結果を提示する。第 4 節では、調査結果の数値としてカウントする動詞形を決定する際に問題となった使役の補助動詞、非使役の意味を持つ接辞、そしてウェールズ語の非人称形について言及する。最後に第 5 節でのまとめをもって本稿を締めくくる。

## 2. 調査方法と自他の判定方法

### 2.1 調査方法

迂言文の調査ではウェールズ南部の Rhondda Cynon Taff 出身、現代ウェールズ語母語話者の 25 歳女性に協力いただいた。屈折文の調査では事情によりインフォーマントからの聞き取り調査が困難となったため、電子コーパス *Corpws Electroneg y Gymraeg* (Electronic Corpus of Welsh) を使用した<sup>2</sup>。現代ウェールズ語では迂言文の使用が非常に多く、屈折文の用例は数が絞られる。ターゲットとなる形式がコーパス内で見つからない場合には、ウェールズ語版 BBC 等のウェブサイトを検索し、先行研究論文内に例文があればそちらも参照している。

### 2.2 自他の判定方法

本調査では直接目的語の有無によって自他を判定した。さらに直接目的語であるかどうかは可能な限り、直接目的語であると思われる名詞句の先頭子音に、以下で概観する軟音化 (soft mutation) が発生していることで判断した。

ウェールズ語の軟音化は、さまざまな要因によって特定の先頭子音が別の子音に変わる音変移の一種である。本稿に関係するのは、定動詞(句)の直接目的語となった場合に名詞句の先頭

<sup>2</sup> コーパスの出典情報の記述は Arman (2016) の記載法に倣い、出典 → (記載があれば) 作者の順で記載した上で、CEG とマークしている。

子音に起こる軟音化<sup>3</sup>である。ただし軟音化を受ける子音は限られており、また定冠詞の挿入によって軟音化がキャンセルされるため、音変移が発生しうる状況でも実際には表層しない場合がある。

- (3) *gwelais* (i) *gi* *neithiwr*<sup>4</sup>  
 see-PST.1SG (1SG) MUT/dog last.night  
 「私は昨夜犬を見た。」 (Arman 2016:19)
- (4) *gwelais* *i* *y* *dyn*  
 see-PST.1SG 1SG the man  
 「私はその男を見た。」 (Awbery 1976:149)
- (5) *Prynodd* *y* *ddynes* *feic*  
 buy-PST.3SG the woman MUT/bike  
 「その女性は自転車を買った」 (Tallerman 2006:1751)

(3) は最もベーシックな構造であり、直接目的語となっている *ci* ‘dog’ に */c/→/g/* の軟音化が発生している。(4) では定冠詞 *y* により、後続の *dyn* ‘man’ に起こるはずであった */d/→/dd/* の軟音化がキャンセルされる。(5) では直接目的語 *beic* ‘bike’ に */b/→/f/* の軟音化が発生している。紛らわしいが、主語となっている *y ddynes* ‘the woman’ に発生している軟音化は、*ddynes* が女性単数名詞であるため定冠詞によって誘発されている軟音化であり、焦点となっている軟音化とは全く別種のものである。この種の軟音化は今回の調査とは関係がないため、グロスには表示せず、直接目的語に発生する軟音化のみを MUT/で示す。このような軟音化は屈折文でのみ起きるものであり、(6) のように文頭に *bod* ‘be’ を置く迂言文では発生しない。

- (6) *Roedd* *y* *ddynes* *yn* *prynu* *beic*.  
 be-PST.3SG the woman PROG buy-VN bike  
 「その女性は自転車を買っていた。」 (Tallerman 2006:1752)

迂言文では直接目的語の軟音化が発生しないため、或いは屈折文であっても (4) のように定冠詞の挿入などによって軟音化がキャンセルされることがあるため、軟音化は直接目的語の絶対的なマーカーであるとはいえない。本調査ではこの理由から、本来は軟音化によって直接目的語を判定するのが望ましくはあるが、直接目的語が軟音化によって示されない場合には、意

<sup>3</sup> 軟音化による直接目的語のマーキングは長らく言語学的研究で取り上げられてきた特徴であり、Thomas (1996: 405)、Zwicky (1984) は、軟音化の主な機能の一つに「定動詞の直接目的語が対格になっていることを標示する」ことを数えている。しかしながら、Harlow (1989)、Borsley & Tallerman (1999)、Tallerman (2006) などは、直接目的語の軟音化が格標示の機能を持つことは否定している (Tallerman 2006)。

<sup>4</sup> ウェールズ語は、スペイン語やイタリア語と同じく、主語の省略が可能な言語 (Pro-drop language) である (Arman 2015:19) ため、(3) のように、動詞の屈折形によって主語の人称と数が明らかになっている場合には、主語が省略されることも多い。

味の面で直接目的語であるかどうかを判定した。

以上を踏まえながら、次節ではウェールズ語の自他交替の調査結果を提示する。

### 3. ウェールズ語における自他交替

当節では迂言文と屈折文それぞれでの自他交替調査の結果を示す。角括弧中に表示する番号は、Haspelmath の動詞リスト上での番号を表している。はじめに 3.1 節で迂言文での調査結果を、3.2 節で屈折文での調査結果を、そして 3.3 節で 2 つの調査結果をまとめる。

#### 3.1 迂言文での調査結果

はじめに bod ‘be’ と動名詞を組み合わせて作る迂言文での調査結果を示す。迂言文は母語話者からの聞き取りの中で調査を行った。動詞はすべて動名詞形で引用する。使役型(causative) と両極型 (equipollent) の自他交替は観察されなかったため、記述を省略している。

##### 3.1.1 逆使役型 (anti-causative) の動詞

非使役的な意味を持つ動詞（自動詞）が有標な形で現れる逆使役型の自他ペアには以下のものがある。(7) の動詞の用例を (8) で部分的に示す。角括弧内の数字は Haspelmath の動詞リスト上での番号に対応しており、各語の注釈の際に用いている。

(7) [20]mynd ar goll ‘get lost’ : colli ‘lose’, [26]ymgasglu/casglu ‘gather’

##### (8) a. 自動詞文

<i>Roedd</i>	<i>y</i>	<i>pwrs</i>	<i>wedi</i> <sup>5</sup>	<i>mynd</i>	<i>ar</i>	<i>goll.</i>
be-IMPF.3SG	the	purse	PERF	go-VN	on	MUT/loss

「財布がなくなった。」

##### b. 他動詞文

<i>Roedd</i>	<i>e</i>	<i>wedi</i>	<i>colli</i>	<i>ei</i>	<i>bwrs.</i>
be-IMPF.3SG	he	PERF	lose-VN	his	MUT/purse

「彼は財布をなくした。」

[20] : 自動詞 mynd ar goll の goll は colli と同語根で、‘loss’ に対応する名詞である。前置詞 ar ‘on’ は後続する名詞句の先頭音に軟音化 (soft mutation) を誘引するため、coll→goll の音変移がある。

[26] : 自動詞 ymgasglu は ym-gasglu に分けられる。ymgasglu は casglu と同じ語根を持つが、接辞 ym-が後続する語の先頭音に軟音化を誘引するため、casglu→gasglu になっている。この接辞

<sup>5</sup> wedi は脚注 1 の yn ‘in’ と同様、前置詞由来のアスペクトマーカである。元々 ‘after’ を意味する wedi は完了のアスペクトを示す。

は *ym/am* ‘about/around’ という前置詞に起源を持ち (Morris-Jones 1913: 263-264)、現代ウェールズ語では再帰や相互態を意味する接辞として使われる。

[26]: 自動詞 *ymgasglu* は人間が動作主である場合にのみ使われる。これ以外に自動詞の ‘gather’ に対応するものとして、Poppe (2008) は *crynhoi* あるいは *dod at ei gilydd* (‘come on the whole/together’) を挙げている。*crynhoi* は他動詞の用法があり、独自の自他両用型のペアを作っている。また、辞書上では *crynhoi* は英語の ‘amass’ に近い意味をもつとされる。このことから本調査では *crynhoi* は扱わないことにした。一方、*dod at ei gilydd* は *casglu* と補充型のペアを作っており、こちらに関しては 4.1.3 節の補充型に分類した。

### 3.1.2 自他両用型 (labile) の動詞

使役的な意味を持つ動詞（他動詞）と自動詞が同形で表される自他両用型の動詞とその用例には以下のものがある。(9) の動詞の用例を (10) で部分的に示す。角括弧内の数字は Haspelmath の動詞リスト上での番号に対応しており、各語の注釈の際に用いている。

- (9) [1]berwi ‘boil’, [2]rhewi ‘freeze’, [3]sychu ‘dry’, [4]deffro/dihuno ‘wake up’, [5]diffodd ‘go out/put out’, [6]suddo ‘sink’, [7]dysgu ‘learn/teach’, [8]toddi ‘melt’, [9]stopio ‘stop’, [10]troi ‘turn’, [11]toddi/hydoddi ‘dissolve’, [12]llosgi/tanio ‘burn’, [14]llewni ‘fill’, [15]finish ‘gorffen’, [16]dechrau ‘begin’, [17]taenu ‘spread’, [18]rholio ‘roll’, [19]datblygu ‘develop’, [21]codi ‘rise/raise’, [22]gwella ‘improve’, [23]siglo ‘rock’, [24]cysylltu ‘connect’, [25]newid ‘change’, [27]agor ‘open’, [28]torri ‘break’, [29]cau ‘close’, [30]holhti ‘split’

#### (10) a. 自動詞文

<i>Mae</i>	<i>e</i>	<i>wedi</i>	<i>dihuno.</i>
be-PRS.3SG	he	PERF	wake up-VN

「彼は目を覚ました。」

#### b. 他動詞文

<i>Mae</i>	<i>e</i>	<i>wedi</i>	<i>dihuno</i>	<i>y</i>	<i>dyn.</i>
be-PRS.3SG	he	PERF	wake up-VN	the	man

「彼はその男性の目を覚まさせた。」

[4]: ウェールズ北部では *deffro*、南部では *dihuno* と言われることが多い。

[7]: インフォーマントは *dysgu* を ‘learn’ と ‘teach’ のどちらにも対応するものと言っていたが、Poppe (2008) は、官僚組織の語彙では *dysgu* ‘learn’ と *addysgu* ‘teach’ の対立があると注釈をつけている。本調査ではインフォーマントの使用を重視し、自他両用型として記述した。

[9]: *stopio* ‘stop’ は英語からの借用語である。Poppe (2008) の調査では、*stopio* ともう一つ、自

動詞 *sefyll/aros* : 他動詞 *gwneud sefyll/aros* (*gwneud* は ‘do/make’ の意味を持つ) の使役型のペアが記述されている。しかしインフォーマントに尋ねたところ、「自分は通常 *stopio* を使う」とのことであった。また、電子コーパスおよび辞書上で *gwneud sefyll/aros* の用例が確認されなかったため、本調査では *stopio* のみを採用した。

[11] : ‘dissolve’ に対応するものとしては基本的に ‘melt’ と同形の *toddi* を使う。*hydoddi* は商品説明などで見ることがあるという。*hy-*は容易性や徹底性を表す接辞である (GPC)。*‘melt’* と異なり、‘dissolve’ では他動詞用法で *gwneud* が付加される事例は見られなかった。

### 3.1.3 補充型 (suppletive) の動詞

異なる語根を持つ自他のペアとその用例には以下のものがある。ここでの用例はコーパスから引用したものである。(11) の動詞の用例を (12) で部分的に示す。角括弧内の数字は Haspelmath の動詞リスト上での番号に対応しており、各語の注釈の際に用いている。

(11) [26]*dod at ei gilydd* ‘gather (intr.)’ : *casglu* ‘gather (tr.)’, [31]*marw* ‘die’ : *lladd* ‘kill’

(12) a. 自動詞文

<i>byddai</i>		<i>grwpiau</i>	<i>bychain</i>	<i>o</i>	<i>athrawon</i>	<i>o</i>	<i>r</i>	<i>un</i>
be-SUBJ IMPF.3SG		groups	small	of	teachers	of	the	same
<i>fryd</i>	<i>yn</i>	<i>dod</i>	<i>at</i>	<i>ei</i>	<i>gilydd</i>			
mind	PROG	come-VN	to	POSS-3SG	MUT/another			

「同じ思想を持つ教師たちで構成される小さなグループが集まるだろう。」

(Agweddu ar Ddysgu laith, Geraint Wyn Jones, CEG)

b. 他動詞文

<i>bu</i>	<i>Mathew</i>	<i>Fontaine</i>	<i>Maury</i> ,	[...],	<i>yn</i>	<i>casglu</i>
be-PST.3SG	M.	F.	M.		PROG	gather-VN
<i>gwybodaeth</i>	<i>am</i>	<i>flynyddoedd</i> .				
information	for	MUT/years				

「M.F.M は長年に渡って情報を収集していた。」

(Y Ffordaith Bell, Aled Eames, CEG)

[26] : 3.1.1 節で言及したように、‘gather’ には、自動詞 *ymgasglu* : 他動詞 *casglu* という逆使役型のペアも存在する。

### 3.1.4 その他の動詞

[13] : *distrywio/dinistrio* ‘destroy’ には他動詞用法しかなく、従って自他交替が発生しない。‘to



be destroyed’ のように動作主を明示しない場合には、動詞の非人称形 (第 5 節を参照) が用いられる。結果数値から見て、Poppe (2008) もこの動詞についてはカウントしておらず、全体の動詞数を 30 で算出している。

### 3.2 屈折文での調査結果

3.1 節で参照した迂言文では、調査対象となる動詞は動名詞として、bod ‘be’ と組み合わせて用いられる。当節では追加調査として行った、定動詞が文頭に置かれて人称、数、時制を標示する形に屈折する文での自他交替の様子を記述する。本稿ではこのように定動詞が屈折形である文を屈折文と呼ぶ。この種の文の調査は主に電子コーパスを使用した。用例は基本的に過去形で抽出したが、コーパス上に過去形の用例が見つからなかった場合には他の時制で抽出している。

#### 3.2.1 逆使役型 (anti-causative)

非使役的な意味を持つ動詞 (自動詞) が有標な形で現れる逆使役型の自他ペアには以下のものがある。(13) の動詞の用例を (14) で部分的に示す。

(13) [20]mynd ar goll ‘go on loss→get lost’ : colli ‘lose’, [26]ymgasglu/casglu ‘gather’

(14) a. 自動詞文

*ymgasglai<sup>6</sup> pawb [...] ar hyd y cledrau*  
gather-IMPF:3SG everyone [...] on length(along) the staves  
「人々は柵に沿って集まるだろう。」  
(Streic, Streic, Streic, Robert Griffiths, CEG)

b. 他動詞文

*casglodd Henry Hughes lawer iawn o drysorau.*  
gather-PST:3SG H. H. MUT/many very of treasures  
「H.H.はとても多くの宝を集めた。」  
(Bywyd Bob Owen, Dyfed Evans, CEG)

#### 3.2.2 自他両用型 (labile)

使役的な意味を持つ動詞 (他動詞) と自動詞が同形で表される自他両用型の動詞とその用例には以下のものがある。(15) の動詞の用例を (16) で部分的に示す。

(15) [1]berwi ‘boil’, [2]rhewi ‘freeze’, [3]sychu ‘dry’, [4]deffro/dihuno ‘wake up’, [5]diffodd ‘go out/put out’, [6]suddo ‘sink’, [7]dysgu ‘learn/teach’, [8]toddi ‘melt’, [9]stopio ‘stop’,

<sup>6</sup> -ai は本来は三人称単数半過去を表す動詞接辞である。ウェールズ語では bod ‘be’ 以外の動詞の半過去形は条件法の意味を持つ。半過去の意味を持つ文を作る場合には、bod と動名詞を用いた迂言文を用いる。



[10]troi ‘turn’, [11]toddi/hydoddi ‘dissolve’, [12]llosgi/tanio ‘burn’, [14]llewni ‘fill’, [15]finish ‘gorffen’, [16]dechrau ‘begin’, [17]taenu ‘spread’, [18]rholio ‘roll’, [19]datblygu ‘develop’, [21]codi ‘rise/raise’, [22]gwella ‘improve’, [23]siglo ‘rock’, [24]cysylltu ‘connect’, [25]newid ‘change’, [27]agor ‘open’, [28]torri ‘break’, [29]cau ‘close’, [30]holhti ‘split’

## (16) a. 自動詞文

*sychodd llawer o afonydd*  
dry-PST.3SG many of rivers  
「川の多くが乾いた (干上がった)」  
(Wrth Ymdaith, Dewi W. Thomas, CEG)

## b. 他動詞文

*sychodd ei dagrau yn ei ffedog.*  
dry-PST.3SG her tears in her apron  
「(彼女は) 前掛けの中で涙を乾かした」  
(Y Meini'n Siarad, Bernard Evans, CEG)

## 3.2.3 補充型 (suppletive) の動詞

異なる語根を持つ自他のペアとその用例には以下のものがある。(17) の動詞の用例を (18) で部分的に示す。

(17) [26]dod at ei gilydd ‘gather (intr.)’ : casglu ‘gather (tr.)’, [31]marw ‘die’ : lladd ‘kill’

## (18) a. 自動詞文

*farwodd<sup>7</sup> John yn sydyn.*  
die-PST.3SG J. ADVLZ sudden  
「J.は突然死んだ」 (Jones 2010: 360)

## b. 他動詞文

*lladdodd yr un daeargryn yn agos i gant*  
kill-PST.3SG the one earthquake ADVLZ close to MUT/hundred  
*pum deg o bobl.*  
five ten of people  
「1つの地震が150人近く人々を殺した。」

<sup>7</sup> 前の文の接続との関係から、m→fの軟音化が発生している。

(Dyw fy Nhraed Ddim yn cael Ewinrhew, CEG)

[31] : marw ‘die’ の屈折形での使用は用例が存在したものの、Poppe (2008) は、marw には bod ‘be’ を伴う迂言文が使われると注釈している。

結果として、迂言文と屈折文とで異なる自他交替は見られなかった。[13] distrywio/dinistrio ‘destroy’ については、屈折文でも非使役的な用法（自動詞用法）は確認できなかった。

### 3.3 動詞対のリストと自他交替の割合

当節では 3.1 節および 3.2 節の調査結果を統合した結論を提示する。表 2 に記載された動詞はすべて動名詞形であり、表の先頭列および左側 2 行は Haspelmath (1993) の Table 4 にもとづく。

表 2 ウェールズ語の自他交替調査結果

	動詞 (A/C 比 の昇順)	非使役形	使役形	形態的関係の型
1	boil	berwi	berwi	L
2	freeze	rhewi	rhewi	L
3	dry	sychu	sychu	L
4	wake up	deffro/dihuno	deffro/dihuno	L
5	go out/put out	diffodd	diffodd	L
6	sink	suddo	suddo	L
7	learn/teach	dysgu	dysgu	L
8	melt	toddi	toddi	L
9	stop	stopio	stopio	L
10	turn	troi	troi	L
11	dissolve	toddi/hydoddi	toddi/hydoddi	L
12	burn	llosgi/tanio	llosgi/tanio	L
13	destroy			
14	fill	llenwi	llenwi	L
15	finish	gorffen	gorffen	L
16	begin	dechrau	dechrau	L
17	spread	taenu	taenu	L
18	roll	rholio	rholio	L
19	develop	datblygu	datblygu	L
20	get lost/lose	mynd ar goll	colli	A
21	rise/raise	codi	codi	L

22	improve	gwella	gwella	L
23	rock	siglo	siglo	L
24	connect	cysylltu	cysylltu	L
25	change	newid	newid	L
26	gather	ymgasglu	casglu	A
		dod at ei gilydd	casglu	S
27	open	agor	agor	L
28	break	torri	torri	L
29	close	cau	cau	L
30	split	holhti	holhti	L
31	die/kill	marw	lladd	S

次の表 3 は表 2 の結果から自他交替の型を割合にしたものである。Haspelmath (1993) に従い、英語の動詞 1 つに対して 2 つのウェールズ語の動詞がある場合には 0.5 として数える。[13] distrywio/dinistrio は他動詞用法しか存在しないため、全体の動詞数を 30 として計算した。

表 3 ウェールズ語の自他交替型の割合

自他交替の形	A	C	E	L	S
動詞の数	1.5	0	0	27	1.5
割合(%)	5.0	0.0	0.0	90.0	5.0
無指向派生の割合	95.0				

表 2 および表 3 から分かるように、ウェールズ語では無指向派生、特に自他両用型の動詞が圧倒的に優勢である。最後に、次節で調査中に浮上した問題点について論ずる。

#### 4. 調査上の問題点

当節では、記述対象にする動詞を選択する差異に問題となった使役の補助動詞、非使役の意味を持つ接辞、そしてウェールズ語の非人称形について考察する。

##### 4.1. gwneud ‘do/make’ の付加について：

[8] toddi ‘melt’ の聞き取り調査のなかで、Poppe (2008) の記述には確認されない、gwneud toddi ‘melt (intr.)’ という自動詞が観察された。gwneud は ‘do/make’ の動名詞形であり、Poppe の提示する gwneud sefyll/aros ‘do/make stop’ という他動詞の構成要素にもなっていることから、使役化の機能を持っていると思われる。

‘melt’ は表す事象の自発性が高い場合が多く、通言語的に使役型の自他交替になりやすい動詞である。ウェールズ語の toddi もまた、非使役的な意味が基本であるとすれば、「～を溶かす」

と言う際に *gwneud* が付加されるのも頷ける。しかしながら、‘freeze’ や ‘dry’ など、同じように自発性の高い動詞の他動詞用法で *gwneud* が付加された事例が本調査では確認されなかった。このことから、インフォーマントが *toddi* に対して *gwneud* と付加したのは、他動詞であることをより分かり易く伝えるためであった可能性が否定できない。また聞き取り調査では *gwneud* を付けない (19) の他動詞文を試した際にも容認された。

- (19) *Mae e wedi toddi y meny.*  
 bod-PRS.3SG he PERF melt-VN the butter  
 「彼はバターを溶かした。」

本調査では *gwneud* を付加せずに他動詞と容認されるものは自他両用型として分類した。

#### 4.2. 接辞 *ym-*について

接辞 *ym-*は再帰や相互態を意味する接辞として使われる。ただし[26]*ymgasglu* ‘gather (intr.)’ から分かるように、非使役的な動詞を作る機能も持っている。辞書 (GPC) を参照すると[26]と同様、[6]*ymsuddo* : *suddo* ‘sink’ や[17]*ymdaenu* : *taenu* ‘spread’ のように、*ym-*を伴う形で非使役的な意味を持つ動詞が多数観察される。これを踏まえると、調査対象の動詞のなかにも非使役的な形が有標となる逆使役型の自他交替をすると解釈できるものがある。

しかしながらインフォーマントからの聞き取りにおいて、でこのように *ym-*を伴う形で表されたものは[26] ‘gather’ のみであった。また、コーパス上の用例も見当たらず、[6]や[17]の *ym-*形は原理的には容認されるものの、実際の使用での頻度は極めて低いと思われる。今後、*ym-*はどこまでの範囲の動詞に付加することができるのかを、再帰および相互態と照らし合わせながら検討していく必要がある。

#### 4.3. 非人称形について

口語での使用頻度は少ないが、ウェールズ語の動詞には、非人称形と呼ばれる形がある。非人称形は直説法現在/未来・過去・半過去・大過去、接続法現在/未来・半過去、命令法という独自のパラダイムを持つ (Morris-Jones 1913)。非人称形を用いると、他動詞用法しか存在しない動詞でも、目的語のない文を作ることができる。例えば[13]*dinistriw* ‘destroy’ は他動詞用法しか存在しない動詞であるが、(20) のように非人称形にすることによって、「～が破壊される」と言うことができる。

- (20) *dinistriwyd y byd hwnnw gan y rhyfel byd cyntaf*  
 destroy-PST.IMPS the world that by the war world first  
 「あの世界は第一次世界大戦によって破壊された。」  
 (Protest a Thystiolaeth, Dewi Eirug Davies, CEG)

(20) から分かるように、一見するとウェールズ語の動詞非人称形の機能は受身に近い。多くの先行研究においても (21) のような「bod ‘be’ + cael ‘get’ + 被動者を示す代名詞所有格」という構造をとる分析的受動文と同一視される傾向にある (Awbery 1976)。

- (21) *mae*<sup>8</sup>            *hen longau hwyliau wedi cael eu dinistrio.*  
 bod-PRS.3SG    old ships    sails    PERF    get-VN    POSS.3PL    destroy-VN  
 「古い帆船が破壊された。」  
 (Oriol Ynys Môn, CEG)

[13]*dinistrio* ‘destroy’ はたとえ表層には現れていなくとも言外の動作主が想定される動詞であり、動作主が分からない場合には非人称形、或いは分析受動文が用いられる。また[26] ‘gather’ も、不定の動作主によって「誰か／何かによって集められている」ことが多いため、自動詞形と同等かそれ以上に非人称形や迂言的受身構造の頻度が高いようである。

ただし、ウェールズ語の非人称形は不定の動作主によって被動者が影響を受けるという使役的な意味を示すことがその機能の中心にあるわけではない。というのも、ウェールズ語の非人称形は以下のような自動詞（非能格自動詞）文にも適用可能だからである。

- (22) a. *rhedir yno*  
 run-PRS-IMPS    there  
 「人(々)はここで走る。」 (Arman 2016: 117)
- b. *cwympir yn aml yma*  
 fall-PRS-IMP    ADVLZ    often    here  
 「人(々)はここでよく転ぶ。」 (ibid.:117)    (非能格自動詞非人称文)

Arman (2016) はウェールズ語の非人称形の中心的な機能は動作主を抑圧し、外項として不定および人間の主語を想定することであると主張する。本調査においても非人称形についてはこの見方をとり、この形態は自他の区別とは異なる領域に属すものとして見なした。したがって本稿では非人称形を自他交替に関わる形としては数えていない。ウェールズ語の非人称形は Arman (2016) による非対格自動詞への不適合の発見など、現在も議論がなされる領域である。この形態の起源と機能については今後も議論していく必要があるだろう。

## 5. 結論

以上、ウェールズ語の迂言文と定動詞が屈折形である文（屈折文）を対象とした自他交替調査の結果を提示した。この調査から、ウェールズ語では自他両用型の自他交替が圧倒的に優勢

<sup>8</sup> 3 人称の主語が代名詞以外の複数名詞であるとき、bod ‘be’ との間に数の一致が発生しない。3 人称複数代名詞の *nhw* ‘they’ が主語である場合は bod も三人称複数形の *maen* になる。

であること、また、使役型、両極派生型の自他交替は極めて割合が低いことが確認された。ウェールズ語の自他交替についての先行研究である Poppe (2008) の調査結果と比べると、本調査で導いた数値はわずかに異なっている。この差異は Poppe が [9] ‘stop’ に対応するものとして使役型の自他交替をもつ動詞対を採用していることに起因している。このことから分かるように、自他交替の調査ではどの動詞を記述対象とするかによって結果に揺れが生じるといえる。

## 略号一覧

1 : 1 人称、3 : 3 人称、ADVLZ : 副詞マーカ、IMPf : 半過去形、IMPS : 非人称形、intr : 自動詞、MUT/ : 軟音化、PERF : 完了相、PL : 複数形、POSS : 代名詞所有格、PROG : 進行相、PRS : 現在形、PST : 過去形、SG : 単数形、SUBJ : 接続法、tr : 他動詞、VN : 動名詞形

CEG – Corpwys Electroneg y Gymraeg ‘Electronic Corpus of Welsh’ (Ellis, O’Dochartaigh, Hicks, Morgan & Laporte 2001) : <http://corpws.cymru/>

GPC – Geiriadur Prifysgol Cymru, A Dictionary of the Welsh Language. The standard historical Welsh dictionary. Cardiff. 1950-2015 : <http://www.geiriadur.ac.uk/>

## 参考文献

- Arman, Laura. (2016) The Welsh impersonal construction [Doctoral dissertation, University of Manchester, Manchester, UK]. <https://www.escholar.manchester.ac.uk/uk-ac-man-scw:295940>
- Awbery, Gwenllian. (1976) *The syntax of Welsh: A transformational study of the passive*. Cambridge University Press.
- Haspelmath, Martin. (1993) More on the typology of inchoative/causative verb alternations. In Bernard Comrie & Maria Polinsky (eds.), *Causatives and transitivity*, 87-120. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.
- Jones, Bob Morris. (2010) *Tense and Aspect in informal Welsh*. Berlin: Walter de Gruyter.
- Morris-Jones, John. (1913) *A Welsh grammar, historical and comparative : phonology and accidence*. Oxford :Clarendon.
- Poppe, Erich. (2008) Standard Average European and the Celticity of English intensifiers and reflexives : some considerations and implications. *English Language and Linguistics* 13.2: 251-266. Cambridge: Cambridge University Press.
- Tallerman, Maggie. (2006) The syntax of Welsh ‘direct object mutation’ revisited. *Lingua* 116. 1750-76.
- 小池剛史 (2011) 『ウェールズ語の基本』 東京: 三修社

# Inchoative and Causative Verb Alternations in Modern Welsh

Chisaki Asano

chisakiasano@gmail.com

**Keywords:** Modern Welsh, inchoative/causative verb alternations, linguistic typology

## Abstract

The purpose of this paper is to explore inchoative and causative verb alternations in Modern Welsh, based on the 31-verb pair list proposed in the cross-linguistical analysis of Haspelmath (1993). Modern Welsh has two major types of verbal constructions: periphrastic constructions formed with inflected bod ‘be’ and verb nouns, and inflectional constructions in which tense, number and person are expressed on inflected main verbs. On this research I examined both types of constructions above, and diagnosed intransitive and transitive properties based on the presence of direct objects. The result shows that the labile alternation is the most prevailing type of Welsh verb alternations among the five typological categories.

(あさの・ちさき 東京大学大学院)